連載企画

OB・OGの職場探訪

サントリー・ラグビー部

長友泰憲さん（2008年経済学部卒）

自分の好きなことや得意なことを生かして就職することができたなら、それはどんなにも素敵なことだろう。しかし、景気減速で厳しい就職戦線を迎えようとしているいま、就活を控えた多くの学生たちにとって、それは夢のような話である。

大学4年間はラグビー一筋「ラグビーなら自分が輝ける」

2008年経済学部卒の本学ラグビー部OB、長友泰憲さんは大学生活4年間をラグビー一筋に過ごし、そのラグビーを生かして、夢のような就職を実現させた一人である。

長友さんは高校一年生のときにラグビーを始めた。きっかけは3つ年上のお兄さんがラグビーをやっていたからである。「始めたときは、練習はきつかったけど毎日が新鮮で、チームの仲間もよく、ただただ楽しかった。でもここまでラグビーを続けるだろうとは思っていなかった」と振り返る。

ラグビーを続けていこうと考えたのは大学2年生のときだった。その理由は？「一番の理由は勉強することが嫌いだったから」と笑ったが、続けて真剣な顔で「だから自分にはラグビーしかないと思っていたし、ラグビーなら自分が輝ける。輝けることをしていたい」と力強く語った。

サントリーにスカウトされる先輩の「いま、決めろ」で決断

長友さんの就職活動は、一般学生とは異なり、企業からのスカウトを待つ状態であった。スカウトを得るためには大学当時の活躍が決め手になるが、試合中、企業に向けてのアピールなどは意識せず、自分のできることを精一杯やったという。

そして、白羽の矢が立ったのは、サントリーのラグビーチームからだった。スカウトをされたのだ。サントリーといえば、名門チームだ。人気もある。だが、思案した。

決めるに当たっては、一流企業であること、チームの強さ、練習環境、と様々なことを検討したという。しかし、一番の決め手は、二つ年上に中大出身のかつてチームメイトであった先輩がいたことであった。

突然かかってきた先輩からの「早く決めろよ」

笑顔で話す長友泰憲さん

という電話の中で、次第に「今、決めろ」という話になり、その場で決断したそうだ。その先輩の存在は今でも心強く頼もしい。

仕事との両立の道選ぶ 営業担当で販売店回り

この時、「完全にプロとしてラグビーだけに専念する道もあった」。しかし、迷うことなく、最初から仕事と両立する道を選んでいたという。

「ラグビーに専念できないことを残念に思う時もあるが、色々なことをやってみたかった。ラグビーは30代後半で引退となってしまうから、その後のために視野を広げておきたかった」

太ももの筋肉は、さすがラガーマン

選手を引退した後は、コーチや教員となり、教える側としてラグビーと関わっていく人が多い。だが、長友さんは別のライフプランを笑いながら教えてくれた。「兄と地元（宮崎）でカフェまたはバーを経営しながら、のんびりと生活したい」と。

現在の仕事は営業担当で、販売店への新商品の直接売り込みや、店頭での紹介を行っている。もともと話すことが苦手で、「肉体的にきついというよりは、精神的にきつい」という。そんなとき頼りになるのはチームメイトで、練習前の着替え中、ロッカールームで仕事の相談をすることもあるそうだ。

ただ楽しいだけではなくなった しっかり遊んでリフレッシュ

シーズン中は、朝7時にサントリーの寮を出て仕事をこなし、午後3時から午後8時まで練習を行う。

仕事としてラグビーをする中で、ラグビーに対する姿勢も変わってきた。学生時代のようにただラグビーが楽しいというだけでなく、レギュラー争いやそのための自己アピールなど、悩むことも増えたという。

仕事やラグビーに行き詰ったときは、「思いっきり遊ぶ」のがリフレッシュ法。「オンとオフをしっかり分けて、遊ぶときは思いっきり遊びます。そういうとき、お金を惜しんだりはしたくない。自分へのご褒美というよりは、これからもがんばるためのエネルギー補給、一種の自己投資です」。

今回お話を伺ったときの長友さんは、真っ黒に日焼けし、日々の練習の厳しさが窺えた。しかし、そんな毎日について話す長友さんは、終始笑顔で、前向きな考えを持っていた。根底には、やはり「ラグビーが好き」という強い気持ちがあることが感じられた。「好きである」ということは何にも勝る原動力となるのだろう。

（学生記者　篠田有紀＝法学部2年）